

## 用例提示機能を備えた Web 版「学習基礎語リスト」の開発

山本裕子（愛知淑徳大学）

川村よし子（チュウ太プロジェクト）

鷺見幸美（名古屋大学）

本研究は、外国人児童のために、学習語彙の習得に役立つ支援ツールを開発し、教科学習につながる日本語学習を支援することを目的としている。ここでの外国人児童は、国籍を問わず日本語指導が必要な児童であり、外国に在住し日本語を継承語として学んでいる児童も含めて考えている。日常語彙に問題のない児童であっても、教科学習のためには必要となる語彙の学習は不可欠である。ところが、何をどのような形で学べば効率的かについて、これまで十分な吟味が行われてこなかった。そこで、学習の基礎となる語彙（以下、学習基礎語）を抽出し、より効率的な語彙学習のための支援環境を提供する必要があると考えた。

これまでも教科書等の語彙の分析を通して「外国人児童のための基礎語」をリストアップする試みはある。例えばバトラー（2011）は、高校までの学習を想定して旧日本語能力試験出題基準（以下 JLPT）の3、4級の語を除外し、教科書から抽出した1,204語を「学習語」としている。しかし、小学校での学習を中心に考えた場合、いわゆる「やさしい」語も不可欠である。そのため本研究では、以下の流れで作業を行った（山本他 2024 参照）。

まず、小学校の教科書の主要5教科（生活・社会・理科・算数・国語）の全学年の教科書について教科書本文をデータ化して単語および複合語を抽出し、学年、教科ごとにリスト化して基礎データを作成した。基礎データは、異なり語数19,149語、延べ語数445,407語と膨大な量となった。次に、ここからより重要な語と考えられるものを絞り込む作業を行った。基礎データから、すべての教科で用いられている語を抽出し、これを学習基礎語1とした。また、5教科中4教科に出現する語を学習基礎語2とした。さらに、教科基礎語として生活は2学年、その他の科目については、科目ごとに3年から6年までの全ての学年に出現している語を抽出した。その際、複数の科目の教科基礎語になる語については、学習基礎語2に組み入れることにした。これらの作業の結果、学習基礎語1は555語、学習基礎語2は843語、各教科の基礎語が計689語抽出できた。学習基礎語1と2に、各教科の基礎語を加え、「学習基礎語リスト」とした。学習基礎語はJLPT3級4級のいわゆる「初級語」が半数を占める一方、2級が33.4%、1級が4.5%、級外語彙も8.2%程度含まれており、必ずしもやさしい語ばかりではない。

この「学習基礎語リスト」を学習支援者が簡便に活用できるように、WEB版を構築し、漢字・文字列・単語・読み・教科・学年・意味領域等、様々な条件で必要な情報を取り出せる検索機能を備えた汎用性の高いデータベースの形にした。また、学習基礎語のすべての語について、教科書での用例も示せるようにした。検索機能を用いて、例えば「上」を部分一致で検索すると、「上がる」「上げる」「取り上げる」「打ち上げる」「上る」等が示される。これらの意味のつながりや広がりや用例によって確認できる。また、「かける」における「手間をかける（社会）」「土に水をかける（理科）」「4をかける（算数）」のように、教科による使い方の違いもわかる。

本研究で抽出した学習基礎語は、どのような語をまず学んでおくかの指標となると考えられる。WEB版学習基礎語リストは、教科ごとの用例等を加えた形で公開を開始している。ことばの世界を広げることは、学習や生活を支える基礎になる。今後さらに学習支援における活用を検討する予定である。

## 参考文献

- バトラー後藤裕子（2011）『学習言語とは何かー教科学習に必要な言語能力ー』三省堂.
- 山本裕子・川村よし子・鷺見幸美（2024）「『教科書基礎語』の抽出ー小学校教科書語彙リストをもとにしてー」『2024年度日本語教育学会春季大会予稿集』pp.222-227.日本語教育学会